

時間的実在論における真理の時間性について(1)

The Temporality of Truth in Temporal Realism (1)

加地 大介*

KACHI Daisuke

本稿では、まず永久主義・(狭い意味での)時間主義・相対主義という、真理の時間性に関する三つの意味論的立場の異同について分析する。その結果、時制表現の指標性を根拠として命題の意味内容を変化させたうえでその真理値は固定する永久主義に対し、意味内容を固定させたうえで真理値を変化させる(広い意味での)時間主義が対比され、さらに後者のうちで、評価者への真理値依存性を認める相対主義と、それを認めない非指標的文脈主義としての(狭い意味での)時間主義が対比される。以上を踏まえ、次にこれらのうちの永久主義のひとつの拠り所となっているG.エヴァンズの時制論理批判の妥当性について批判的に検討する。その結果、エヴァンズは時制論理における真理の時間性を不適切な形で解釈していること、そしてその不適切さは、現在世界を一世界内の一文脈としてではなく現実世界と同様の完結した世界として捉える現在主義者A.N.プライヤーの時間的実在論に対する無理解と、様相論理における現実性についての誤解とに由来することを示す。

キーワード：時間的実在論、真理の時間主義、時制論理

§1 真理についての永久主義と(広い意味での)時間主義

時間と真理との関係については、命題の真理値が時間とともに変わりうるか否かという問いに対して肯定的に答える(広い意味での)時間主義(temporalism)と、否定的に答える永久主義(eternalism)とに大別できる¹。

時間主義者は、異なる時点——たとえば午後2時と午後3時——において発せられた「ソクラテスは座っている」という文は同じ命題「ソクラテスは座っている」を表現していると考えたうえで、その真理値が変わりうる——たとえば午後2時には真だが午後3時には偽である——と主張する。一方、永久主義者はその場合、異なる命題——たとえば「紀元前412年1月1日の1400協定世界時にソクラテスは座っている」と「紀元前412年1月1日の1500協定世界時にソクラテスは座っている」——が表現されていると考えたうえで、それぞれの命題の真理値は不変である——たとえば前者は(永久的に)真だが後者は(永久的に)偽である——と主張する。

このような両者の対立は、特定の日時における(トークンとしての)時制文の使用(occurrence of tensed sentences)に対する真理値についての対立ではない。たとえば、時点 t における「ソクラテスは座っている」の使用が真であるのは、ソクラテスが時点 t において座っている場合である>とい

* 加地・大介、埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授、哲学

¹ 以下の分類は[Macfarlane 09]に依拠している。なおここでの「永久主義」は、時間論の文脈における(存在論的)永久主義と関連はしているが、差し当たっては区別されるべき「意味論的永久主義」である。

う点について、両者はともに同意する²。両者の相違は、当該の時制文が当該の真理条件を獲得する仕組みについてである。永久主義者によれば、当該の時制文の真理値が時点次第で変動する理由は、それが異なる時点において異なる命題を表現し、そしてそれらの命題は異なる（永久的）真理値を持つということである。一方、時間主義者によるその理由は、当該の時制文がすべての時点において表現する（単一の）命題が、それが評価される各時点と相対的に異なる真理値を持つということである。

いわば両者は、命題の真理値については一致しないが（トークンとしての）文の真理値については一致していることになるのだが、この点は、時間主義者の一人であると見なせる D. カプランによる、文と命題の各真理値の間の次のような関係づけによってより明瞭となる³：

もしも *c* が文脈であるならば、*c* における ϕ の使用が真であるのは、次の場合である：この文脈において ϕ によって表現された内容は、その文脈の状況に関して評価されたときに真である。

この定式化においては、文の真理値を決定するにあたって文脈 *c* が二つの異なる役割を果たしている。一つは、その文によってどの命題を表現しているのかを決定する「内容－決定的 (content-determinative)」役割である。もう一つは、文脈 *c* におけるその文に対して真理値を与えるためにどの状況においてその命題を評価すべきかを決定する「状況－決定的 (circumstance-determinative)」役割である。カプランにとっての「状況」は「世界/時点のペア」であり、それは「発話の文脈の世界と時点」であることとなる。

これを踏まえて永久主義者と時間主義者の対立を一般化してみると、次のようなこととなる。両者は、時制文の真理値がその使用の文脈に依存すること、すなわち時制文が「時点－文脈－依存的 (time-context-sensitive)」であること、については一致している。しかし、永久主義者は文脈としての時点が内容－決定的役割を果たすと考えるのに対し、時間主義者はそれが状況－決定的役割を果たすと考える。この結果として、永久主義者が<時制文は時点－指標的 (time-indexical) であり、その結果として時点－文脈－依存的である>と考えるのに対し、時間主義者は<時制文は時点－文脈－依存的ではあるが時点－指標的ではない>と考えるのである。

従来、「文脈主義」一般が重視する「文脈依存性」としては、永久主義者が想定するような「指標性」による「内容－決定的」な文脈依存性しか認定されていなかった。そこで、そのような従来型の文脈主義と、時間主義者が重視するような文脈依存性、すなわち、「非指標的」かつ「状況－決定的」な文脈依存性を重視する文脈主義を区別するために J. マクファーレンが後者に対して与えたのが、「非指標的文脈主義」という名称であった。

指標的文脈主義と非指標的文脈主義の相違は、文脈に依存するのが文の内容であるのかその外延 (extension) としての真理値であるのかの相違であるとも言えるので、マクファーレンは、それぞれ

² 本稿では、英語における 'if and only if' や 'just in case' に相当する日本語として「…のは、…場合である」「…のは、次の場合である：」などの表現を用いる。

³ [Kaplan 1989] p.522.

の依存性を「指標的(indexical)」「文脈-依存的(context-sensitive)」と命名したうえで、それぞれを次のように定式化している(Pは、時点・場所・世界など、文脈の種類を示すパラメーターを表す)⁴：

[D] ある表現が、P-指標的である。 iff ある文脈におけるその表現の内容が、その文脈のPに依存する。

[DC] ある表現が、P-文脈-依存的である。 iff ある文脈におけるその表現の外延が、その文脈のPに依存する。

たとえば、永久主義者のように、<「ニューヨーク市はいま夜である」という表現はその使用文脈に依存して異なる命題を表現するが、その際の各命題の真理値は不変である>と考える場合、その表現は時点-指標的であることになる。これに対し、時間主義者のように、<その表現は常に同一の命題を表現するが、その真理値は時点次第で変動する>と考える場合、その表現は時点-文脈-依存的であることになる。

そして、重要なのは、指標性(indexicality)と文脈依存性(context-sensitivity)は互いに独立であり、いずれも他方を含意せず、したがって P-指標性と P-文脈依存性も互いに独立だということである。たとえば、「明日は今日の後にやってくる」という文は時点-指標的であるが、常に真であるので、時点-文脈-依存的ではない。これに対し、たとえば未来の偶然性を根拠として、「2020年1月1日の1400世界協定時に、さいたま市では雨が降っている」という文は、2020年1月1日の1400世界協定時に実際にさいたま市で雨が降った場合、その時点以降は真であるが、それより前の時点では偽であるとか真偽いずれでもないと考えたりするならば、時点-文脈-依存的だが時点-指標的ではないことになる。すなわち、指標性に依存しない文脈依存性がそこでは成立しているのである。以下では、このように必ずしも指標性に依存しないような文脈依存性を主張する文脈主義としての「非指標的文脈主義」と「指標的文脈主義」としての従来型文脈主義とを、それぞれ「(狭い意味での)文脈主義」と「指標主義」という略称によって呼び分けることとする。

§2 真理についての(狭い意味での)時間主義と相対主義

マクファーレンは、従来型の文脈主義としての「指標主義」が抱えていたいくつかの問題点を免れうる「魅力的な形態の文脈主義」として「非指標的文脈主義」を提示したのだが⁵、彼自身が採用するのは、それとも異なる「相対主義」という立場である。先ほど見たカプランによる定式化においては、文脈が「状況-決定的」役割を果たしている場合が、「指標性」と対比されるところの「文脈依存性」なのであるが、カプランにとっての「状況」は「発話の文脈の世界と時点」であった。たとえば、「さいたま市ではいま雨が降っている」という文の真理値は、その文の発話が行われた世界と時点、言い換えれば、その文が使用された世界と時点における状況と照らし合わせて決定されることになる。この意味で、その文の真理値は「使用-依存的(use-sensitive)」であるとも言える。

⁴ [Macfarlen09] p.232.

⁵ *Ibid.*, p.233.

ただ、文の真理値のこのような依存性は、たしかに文脈に依存しているのではあるが、その真理値が依存するところの文脈自体は「発話の文脈」という特定の文脈に固定されているという点において、いくぶんかは指標主義における真理値の不変性・固定性と共通する側面も分ちもつていたと言える。これに対し、真理値の「使用の文脈(the context of use)」への依存性に加えてさらに「評価の文脈(the context of assessment)」への依存性としての「評価－依存性」(assessment-sensitivity)をも付加することによって真理値の文脈依存性をいっそう徹底させるのが真理の「相対主義」である。マクファーレンは、そのような「相対主義的真理(relativistic truth)」を次のように定式化している⁶：

C_1 におけるAによるSの発話が(その評価の文脈 C_2 と相対的に)真であるのは、 C_1 においてSが表現する命題が C_1 の世界と C_2 において機能している認識的基準とに照らし合わせて真である場合である。

たとえば「さいたま市では明日雨が降っているだろう」という文が発話されたのが2020年1月1日の1400世界協定時であるが、その時点では翌日の降雨がまだ確定していなかったとしよう。しかし結果としてその翌日に実際にさいたま市では雨が降っていた場合、文脈主義のもとではその文は「2020年1月1日の1400世界協定時において真である」ということになる。これに対し、相対主義のもとでは、分岐的な未来時点の各系列の中でさいたま市で雨が降っている翌日の時点では真であり、そうでない各系列の翌日の時点では偽である、という形での、評価時点との相対性が認められることとなる。真理の時間依存性を認める点では、マクファーレンも広い意味での時間主義者とも言えるのであるが、彼の立場を「相対主義」と呼んで、非指標的文脈主義としての狭い意味での「時間主義」と区別することとする。

これまでの議論をまとめると以下のとおりである。命題の時間依存性について、指標的文脈主義者は、命題に含まれる時間的な指標的表現としての時制表現による命題内容の文脈依存性しか認めていないため、そのような文脈依存性を取り除けば真理に関しては無時間性を保持できると考えた結果、真理の時間依存性を否定する「永久主義」の立場を採用した。

これに対し、指標的文脈主義としての永久主義に異を唱える(広い意味での)時間主義者は、それに加えて、固定された命題内容に対して付与される真理値が文脈依存的となる場合も認めたため、真理の時点依存性を主張した。そのうえで、そのような文脈依存性に基づく真理の非指標的文脈主義の立場を採用するのが「(狭い意味での)時間主義」であるのに対し、それよりもさらに徹底した文脈依存性としての評価依存性をも加えて導入するのが、マクファーレンの立場としての「相対主義」である。

私自身は、上記のような判定に基づきつつ、基本的に、非指標的文脈主義としての(狭い意味での)時間主義の立場を採用する。すると、この立場は、そのような相対化は不必要だと考える「永久主義」からの批判と、そのような相対化では不十分だと考えるマクファーレンらの「相対主義」

⁶ *Ibid.*, p.248.

からの批判という双方に対して反論を求められることとなる。本稿では、このうちの前者を代表する H. カペルンと J. ホーソン（以下では「C&H」と略称する）が[Cappelen & Hawthorn 2009]において自らの立場のひとつの拠り所としている、G. エヴァンズが[Evans 1985]において展開した時制論理批判について検討する。時制論理は、「時間的実在論者」として時間主義を代表する一人と見なせる A. N. プライアーがその根拠付けをひとつの目的として創始した論理学体系であり、実際に時間相対的な命題と真理を採用しているからである。

§3 エヴァンズの時制論理批判

エヴァンズの時制論理批判の柱となっているのは、<意義の理論 (theory of sense) は発話の適切さに対する含意を持たなければならないにもかかわらず、時制論理が採用する「時点 t において真である」という時間依存的真理と発話の評価との関係が明瞭でない>という不満であった⁷。すなわち、それは適切な形で意義の理論の構築という言語哲学的要請に基づく不満であり、だとすれば、そのような要請さえ破棄すれば、あるいは、そのような要請を特に考慮する必要のない形而上学的文脈であれば、単に「無視する」ことによってかわすことができるかもしれない。

しかし、まず第一に、形而上学といえども、それを語る理論言語は適切な意味理論に支えられていた方が望ましいことは言うまでもない。そして実際、プライアーは、「時間的実在論 (Temporal Realism)」と称する自己の立場を根拠づけるために、その理論言語が採用すべき論理として時制論理を構築したのであった⁸。

また、エヴァンズが想定するような言語哲学的要請を度外視したとしても、<「真である」という語は、適切な発話行為に対して適用される「正しい」という語と何らかの形で密接な関係を持つべきだ（その極端な場合は、「両者は同一であるべきだ」という主張となるだろう）>という考え方については、誰もが承認するものではないかもしれないが、少なくとも私は全面的に賛成する。

さらに付け加えれば、言語哲学的ではありながら必ずしもエヴァンズと同じではない観点すなわち指標的文脈主義の観点から時間依存的な真理を批判し、真理は単純（単項的）であるべきだという理由によって真理の無時間性・全時間性を主張した「永久主義者」としての C&H も、説明責任は真理の単純性を否定する側にあるという彼らの主張の根拠を次のように述べた⁹：

〔真理の〕単純性はあまりにも自然な見解なので、何らかの哲学的目論見を持っていない限り、ほとんどすべての人によって支持されている；それゆえその提唱者たちをあえて概観すること

⁷ エヴァンズによれば、フレーゲ的な意味での「意味理論 (semantic theory)」の核をなすのは、当該言語中のすべての有意な表現に対してその「意味値 (semantic value)」を割り当てることを課題とする「指示の理論 (theory of reference)」である。そして、フレーゲのように文の意味値を必ずしもその真理値とする必要はないが、それは指示の理論が「意義の理論 (theory of sense)」として機能しうるように選択されなければならない。(Evans 1985] p. 345.)

⁸ 「時間的実在論」という名称は、プライアー自身が用いたものではなく、オーストローム (Peter Ohrstrom) がプライアーの晩年の二つの論文を収めた [Prior 1996] に対する序論の中でプライアーの立場を形容するために用いた語である。なお、その中で提示されている存在論は、できごと (events) の実在性を完全に否定して、もの (things) の実在性のみを主張する極端な「実体主義」の立場であることは注目に値する (*Ibid.*, p.45)。

⁹ [Cappelen & Hawthorn 2009] p.6, n11. 彼らの立場が必ずしもエヴァンズと同一でないという点については、*Ibid.*, p.12, n20 を参照。

にはほとんど意味がない。とはいえ、ひとりの特に雄弁な単純性の提唱者は、エヴァンズ(1985)であり、彼は、私たちがこのモノグラフで想定している敵対者たちが属するいくつかの種類を批判するために単純性を利用した。

この叙述からも、エヴァンズの時制論理批判がいまだに大きな影響力を保っていることが窺えるだろう。というわけで、真理の時間性についてのエヴァンズの解釈についてこれから検討を行うのであるが、彼は三つの解釈を提示している。これらのうち、第二の解釈は、発話の適切さと時間依存的真理との間に内在的な関係を認めず、単なる規約によってのみ対応づける解釈なので、先ほど述べたように両者には緊密な関係を認めるべきだという理由により、検討対象から除外する。

彼は、古典論理における絶対的・単項的真理を(5)という番号を付けて次のように定式化し、それと対比させて第一の解釈 T_1 を(6)として提示している：

$$(5) (\forall S)(\forall u)[\text{Of}(S,u) \supset (\text{Correct}(u) \equiv \text{True}(S))]$$

$$(6) (\forall S)(\forall u)(\forall t)[\text{Of}(S,u) \supset (\text{Correct-at-}t(u) \equiv \text{True } t(S))]$$

彼の診断では、まず第一に、この(6)は、「かつて誰かが支持したと信ずることが難しいほど奇妙な立場」に基づく「過激な解釈」であるにもかかわらず、プライヤーはそれを採用していると読み取れる叙述を何カ所かで行っている¹⁰。また第二に、時制論理においてはこの解釈は大きな問題を引き起こすが、様相論理ではこれに対応する解釈を採用したとしても何の問題も起こらない。

この解釈がなぜ奇妙で過激かと言えば、たとえば「いま、雨が降っている」という(タイプとしての)文を S だとすると、 $\langle u$ がその文の(トークンとしての)発話であるならば、任意の時点 t について、その発話が時点 t において正しい(適切である)のは、 S が時点 t において真である場合、すなわち、時点 t において雨が降っている場合である \rangle ということになる。しかしこれは、「いま、雨が降っている」という同タイプの文の特定の時点におけるひとつの(トークンとしての)発話が、雨が降っているすべての時点では真となり、そうでないすべての時点では偽となる、ということであり、結果として、各時点における真理値によって定まるその発話の適切さに関する評価が時点とともに変動して一定しないということである。だとすれば、発話者はそもそもその特定の発話を行って良かったのか悪かったのかということを判断しようがない。したがって、このような真理概念は、発話の適切さに対して正当な含意を持っていないと言わざるを得ないのである。

このような異常な含意は、(5)で示されるような古典論理の真理はもちろん持ちえない。それが採用する絶対的・単項的真理においては、真理値の「変動」そのものが起こりえないからである。一方、様相論理では、時制論理における「時点 t において真である」と並行的な「可能世界 w において真である」という相対的・指標的な真理が採用されているにもかかわらず、なぜ時制論理と同様の問題が起きないのであろうか。

¹⁰ [Evans 1985] p. 350.

そこで、(6)の様相版を作ってみよう。すると次のようになる：

$$(6w) \quad (\forall S)(\forall u)(\forall w) [Of(S,u) \supset (Correct-at-w (u) \equiv True w(S))]$$

ここで S を「ソクラテスは医者である」という文だとすると、 $\langle u$ がその文の発話であるならば、任意の可能世界 w について、その発話が可能世界 w において正しい（適切である）のは、 S が可能世界 w において真である場合、すなわち、可能世界 w においてソクラテスが医者である場合である \rangle ということになる。しかしこれは、「ソクラテスは医者である」という同タイプの文の特定の可能世界におけるひとつの発話が、ソクラテスが医者であるすべての可能世界では真となり、そうでないすべての可能世界では偽となる、ということであり、結果として、各可能世界における真理値によって定まるその発話の適切さに関する評価が可能世界とともに変動して一定しないということである。

さて、エヴァンズによれば、この場合は何の問題もないということになるのだが、本当にそうだろうか。そもそも、ある可能世界における文 S の発話の適切さ如何が、他の可能世界における S の真理値によって評価されるということ自体がおかしいのではないか。その発話がなされた当の可能世界で実際にソクラテスが医者であればその発話は適切だったのであり、他の可能世界での S の真偽など一切関わりがないのである。そして T_1 によって様相論理の真理を解釈したときのこのような不合理さは、時制論理の場合とまったく同様の不合理さであろう。

結局のところ、重要なのは、たしかに様相論理の場合には解釈 T_1 は何の問題も引き起こさないかもしれないが、その理由はどこにあるのか、ということである。いま見たように、原理的には、様相論理の場合も時制論理とまったく同様の不合理性を T_1 は抱えている。にもかかわらず、それによって問題が起きないのはなぜかと言えば、時制論理の場合は、私たち発話者およびそれに対する評価者が複数の時点にまたがって存在するのに対し、様相論理の場合は、私たちはただひとつの可能世界の中でしか存在できないからである。そのため、特定の発話に対する評価が「変動する」ということが結果として発生しないが、それはやはり、私たちが現実世界というひとつの世界に留まっているという事情に由来する、意味論的にはいわば「偶然的な」結果としてでしかないのである。

時制論理と様相論理の間でのいま述べたような解釈 T_1 に関する原理的な並行性を覆い隠したトリックは、実は(6)の定式化にある。それは本来次の(6')のように定式化されるべきであった：

$$(6') \quad (\forall S)(\forall u)(\forall t_1)(\forall t_2) [(Of(S,u) \wedge At(u, t_1)) \supset (Correct-at- t_2 (u) \equiv True t_2 (S))]$$

そして(6')と並行的な形で様相論理版を定式化すれば次のようになる：

$$(6'w) \quad (\forall S)(\forall u)(\forall w_1)(\forall w_2) [(Of(S,u) \wedge At(u, w_1)) \supset (Correct-at- w_2 (u) \equiv True w_2 (S))]$$

これらのように表現すれば、任意の時点または可能世界での文 S の特定の発話の適切さが、別の

時点や可能世界での S の真理値次第で変動するという不合理さが時制論理・様相論理いずれの場合に関しても如実に現れる。(6)においては、変項 t_i, w_i によって表される発話の時点・可能世界が覆い隠されていたために、その不合理さや時制と様相の並行性が見えにくかったのである。

では、なぜ、そもそもこのように定式化されなかったのだろうか。その理由はおそらく、形式の上では、 T_2 や T_3 よりも(5)に類似した形のものとして T_1 を想定し、定式化したからである(しかし(6')のように正しく定式化してみれば、実は最も類似していない形式であり、だからこそ最も過激な解釈となるのである)。そして(5)では(6)と同様、条件法の前件が $Of(S, u)$ という形で、 u の発話時点を含まない形になっている。

しかし(5)において条件法の前件が時点を含まないことが許されるのは、そもそも $Correct(u)$ にも $True(S)$ にも時点が含まれていないからである。いわば(5)は、「無時間的」(であると同時に「無様相的」すなわち外延的)な定式化であり、真理や適切さの絶対性・安定性は、そのような無時間性・外延性によって、意味論的にはいわば「必然的に」保証されている。そしてそうした無時間性や外延性は何によって保証されているかと言え、そこで想定されている文 S の内容が、最も典型的には、数学的命題や科学法則的命題を表す文であり、そうでない場合は、クワインがいうところの「永久文」すなわち、時制文を無時制化したうえで日時を補った文だからである。そのことは、エヴァンズが、プライヤーやギーチが拠り所としているストア的命題を批判する文脈でフレーゲの次の主張を引用して同調していることから明らかである¹¹：

思想がある時点では真であり別の時点で偽である、ということはなく、他の余地なく (*tertium non datur*) 真か偽かのどちらかなのである。思想がある時点では真で別の時点では偽でありうるといふ誤った見かけは、不完全な表現に由来する。思想の完全な命題または表現は、日時をも含んでいなければならない。

そしてこれらの場合に限れば、本来(トークンとしての)発話は特定の時点と特定の可能世界において行われるものであるにもかかわらず、その発話の時点と世界を問題にする必要はない。しかし時制論理や様相論理のように時制的・様相的な文を扱う場合には、それに伴って $Correct(u)$ 、 $True(S)$ のいずれをも時点や世界に相対化せざるを得ず、その結果として、発話の時点や世界も本来そうあるべき形として明示化されなければならないのである。

§4 時制化された単項的真理

以上の理由で、エヴァンズによる(6)に基づく時制論理的真理の解釈 T_1 は、(5)で表される古典論理的真理の解釈と似て非なるものなのであったが、実は、より真正な意味で(5)と似ていると言える次のような(5n)に基づく時制論理的真理の解釈 T_0 が考えられる：

¹¹ *Ibid.*, p. 350.

$$(5n) \quad (\forall S)(\forall u)[\text{Of}(S,u) \supset (\text{Correct}_n(u) \equiv \text{True}_n(S))]$$

これは、is correct、is true という各表現における is を現在時制の is として解釈したものであり、(5n)の中の $_n$ という表記は、そのことを表している（したがって、この場合の‘n’は、指標として用いられているのではないことに注意されたい）。その点を除けば、(5n)と(5)はまったく同型であり、そこで採用されている真理や適切さの概念は、無時間的か現在時制的かという相違こそあれ、is というコプラのみによって述定されているという意味では、絶対的・単項的・端的だと言える。

にもかかわらず、エヴァンズはなぜこのような定式化に思い至らなかった、あるいは、少なくともそれを採用しなかったのだろうか。おそらくその理由のひとつは、発話の適切さに関する安定性を確保したかったということである。彼は適切な意味理論の構築ということを背景的目的としており、意味理論は、その習得によってただちに適切な言語使用を可能にするようなものでなければならぬと考えていた。その結果、特定の(トークンとしての)発話の適切さに関する判定が時とともに変動するようなことになってはまずいと考え、その結果、無時間的な is によって述定される適切さとそれに対応する無時間的な真理のみを端的な適切さ・真理として承認したのであろう。

先にも述べたように、エヴァンズが念頭に置いているような言語哲学的動機を別にしたとしても、特定の発話の適切さに対する判定が安定したものでなければならぬというのは尤もな要請だと私も考える（この点が、マクファーレンらによる相対主義との相違である）。問題は、現在時制的な適切さや真理の概念を採用することが、ただちにそれらの不安定性を帰結するか、ということである。たしかに、表面的にはそれは明らかであるように思われる。現在においてしか通用しない適切さや真理ほど刹那的で脆弱なものはないだろう。

しかし、(5n)によってある現時点において適切であると判定された発話がその後、次のような定式化(5p)に(5g)を加えることによって、ずっとその判定を維持するということは十分に考えられる：

$$(5p) \quad (\forall S)(\forall u)[\text{Of}(S,u) \supset (\text{Correct}_p(u) \equiv \text{True}_p(S))]$$

$$(5g) \quad (\forall u)[\text{Correct}_n(u) \supset \text{From_now_on } \text{Correct}_p(u)]$$

この中の $_p$ という表記は、was という過去形 be 動詞に対応している（したがって、 $_n$ と同様に、指標的ではない）。すなわち、(5n)は現在時制を用いた端的な適切さと真理を用いているのに対し、(5p)は過去時制を用いた端的な適切さと真理を用いている。また、(5g)中の‘From now-on’は、時制論理で通常‘G’によって表される演算子の表す意味をメタ言語で表したものである。これらの(5n)(5p)(5g)を時制論理の解釈に用いるということは、メタ言語において時制を用いるということであり、いわゆるホモフォニックな意味論を与えるということになるだろう。実際、プライアーはそうのように考えていたのであり、エヴァンズもそのことは承知していたことは、次の彼の叙述によって明らかである¹²：

¹² *Ibid.*, pp.344-5, n3.

この種の理論 [=前後関係を伴う時点の集合を利用した、時制論理の(可能世界)意味論]は、時点に対する明示的な量化を含んでおり、プレイヤーによって好意的に受け入れられるべきものではなかった。実際、プレイヤーは、(私が思うに、正当にも)時制演算子は時点の存在論を含んでいないと主張した。…中略…プレイヤーは、時制化されたメタ言語によるホモフォニックな意味論を提唱すべきであり、そのことは次のような彼の非形式的な説明によって多かれ少なかれ示唆されている:「カルナップ教授は月に向かって飛行しているということがかつて事実であった(It has been the case that→)」が[今]真であるのは、現在時制言明「カルナップ教授は月に向かって飛行している」がかつて真であった場合である。」[下線は原著のものであり、それが時制的コブラであることを示している]

にもかかわらず、エヴァンズはそのことの含意を次のように(私の判断では)過小評価していた¹³:

そのような[ホモフォニックな]意味論と(1)と(2)によって具体化されている意味論 [=前述の「この種の理論」]との相違は、ある種の目的のためには重要かもしれないが、本稿の目的にとっては無関係である。なぜなら私が‘true_t’について提示する疑問は、時制化されたメタ言語において用いられる有意味に時制化できる述語‘true’に対しても完全に並行的に提示できるからである。

しかしまず第一の問題は、本当に「完全に並行的に提示できる」だろうか?ということである。たしかに、(6)については、次のように時点への量化を含まない形で時制的メタ言語を用いて並行的に定式化できる¹⁴:

$$(6n) (\forall S)(\forall u) \text{Always}[\text{Of}(S,u) \supset (\text{Correct}_n(u) \equiv \text{True}_n(S))]$$

(Always p =df. Hp ∧ p ∧ Gp. Correct_n, True_n については、(5n)と同じ。)

しかし、(6)によって示された第一の解釈 T₁ の本来あるべき定式化としての上記の(6*)、(6*w)およびエヴァンズが時制論理的真理の第三の解釈 T₃ として定式化した次の(7)についてはどうだろうか:

$$(7) (\forall S)(\forall u)(\forall t) [(\text{Of}(S,u) \wedge \text{At}(u,t)) \supset (\text{Correct-at-}t(u) \equiv \text{True } t(S))]$$

これらの定式化で問題となるのは、At(u,t)である。すなわち、これは「uは時点tにおいてなされた発話である。」(「である」は無時制)ということを表しているが、時点への指示や量化を排除する

¹³ Ibid.

¹⁴ ‘Of(S,u)’のコブラ如何はここでの問題には無関係である。また、‘H’, ‘G’は、通常の時制論理で用いられる演算子である。

ためには、それを「u は現在なされた発話である（「である」は現在時制）」という形にしなければなら
ないだろう。それを「u_n」と表記することにしよう。すると(7)は次のように定式化されることにな
るだろう：

$$(7n) \quad (\forall S)(\forall u) \text{Always} [(Of(S,u) \wedge u_n) \supset (\text{Correct}_n(u) \equiv \text{True}_n(S))]$$

これと同じ方法を(6')に適用すると、(6')も次のように定式し直されることになる：

$$(6'n) \quad (\forall S)(\forall u) \text{Always} [(Of(S,u) \wedge u_n) \supset \text{Always}(\text{Correct}_n(u) \equiv \text{True}_n(S))]$$

しかし、(6'w)についてはどうだろうか。同様の形で再定式化すると、次のようになるだろう：

$$(6'w') \quad (\forall S)(\forall u) \text{Necessarily} [(Of(S,u) \wedge u_a) \supset \text{Necessarily} (\text{Correct}_a(u) \equiv \text{True}_a(S))]$$

ここで「u_a」「Correct_a(u)」「True_a(S)」における「_a」は、「_n」が「現在において…である」
を表していたのに対し、「現実世界において…である」を表している。そしてこの際重要なのは、こ
の場合の「_a」は、ホモフォニックな時制的意味論における「現在において…である」の場合と同
様、あくまでも様相的なホモフォニックな意味論の中で用いられる「現実世界において…である」
という表現であり、決して可能世界に対する指示を含む指標的表現ではないし、また、各可能世界
に対して中立的であるという意味での「無様相的な」表現でもないということである。

だとすれば、エヴァンズが解釈 T₁ によるところの時制論理における‘true_t’について提示する疑問
が、彼が主張するとおり「時制化されたメタ言語において用いられる有意味に時制化できる述語‘true’
に対しても完全に並行的に提示できる」のだから、解釈 T₁ によるところの様相論理における‘true_a’
に対しても、同様の疑問を「様相化されたメタ言語において用いられる有意味に様相化できる述語
‘true’に対しても完全に並行的に提示できる」ことになってしまうだろう。

そして何よりも最大の問題点は、エヴァンズは、プライアーが時制化されたメタ言語によるホモ
フォニックな意味論を提唱していることを理解しており、そして自分の議論が完全に並行的にその
ようなホモフォニックな意味論に即して展開できると自認しているにもかかわらず、(5n)のような
形での時制化されたホモフォニックなメタ言語による絶対的・単項的な真理の並行的な定式化に思
い当たらなかった、あるいは少なくともそれを取り上げなかったということである。

エヴァンズが、解釈 T₁ のような誰から見てもあり得ない解釈の可能性を、僅かにでもプライアー
に押しつけるということの異常さに鈍感でありえたのも、おそらくこの問題点に由来する。まず第
一に、プライアーは、現実世界は、指標を伴わない端的・絶対的な真理によって捉えられるもので
あると考える点において、エヴァンズと完全に一致している。そのことは、次の叙述からも明らか

である¹⁵：

…実在世界あるいは現実世界において X が成立していると言うこと、あるいは、X が本当に (really)、現実的に (actually)、あるいは実際に (in fact)、成立していると言うことは、いかなる接頭辞 (prefix) も伴うことなく、ただ単に、X が成立していると言うことでしかないのである。

そのうえで、彼はまったく同じ図式を現在時制文に次のように適用している¹⁶：

さて、今度は現在についてである。私たちは、ベトナム戦争のような何かがそこで起きる世界の中の一領域として現在を捉え、ヘイスティングズの戦いや人類の火星着陸のような他の何かがそこで起こる他の領域として過去や未来を捉えがちである。しかし、この図式に対しては、他の諸々の箱や領域の中の一つの箱や領域としての「実在世界」という図式に対するのと同じ異議を唱えられる。その図式は、何が現在について特別である (*special*) のかを明らかにしない。そしてその中でも特に、いかにして現在が *実在的* (*real*) であり、過去と未来がそうでないのかを明らかにしないのである。そして私が示唆したいのは、現在の実在性は他のすべてのものの実在性が存するところ、すなわち、それを限定する接頭辞を欠いているというところに存する、ということである。

エヴァンズが理解できなかったのは、現在世界を、現実世界の中のひとつの「領域」として、あるいはエヴァンズの言葉で言えば、ひとつの「文脈」としてではなく、実在世界そのものとして捉えるというプライアーの発想である。そのことは、時制論理に対する解釈 T_3 の新奇さを主張する文脈での次のようなエヴァンズの説明に明らかである¹⁷：

二つの付加的な——第一人称による文の前に置くことができる——演算子「右側において (To the right)」 「左側において (To the left)」を含むことを除いてはまったく英語と同様である言語があると想定しよう。時点 t において話者 x によって発せられた「右側において (私は暑い) (‘To the left (I am hot)’)」が真であるのは、時点 t において x の左側はかなり近くに暑がっている誰かが存在する場合である。…中略… T_3 によって解釈されるどころの原理(2)は、この仮想的な言語における演算子を支配するまったく同種の意味規則である。しかしながら、もしもこの例が新たな形式の埋め込みの整合性を明らかにすることに役立つならば、それはその新奇さをたしかにクローズアップする。「おそらく (私は暑い) (‘Possibly (I am hot)’)」 「言われるところでは (私は暑い) (‘Allegedly (I am hot)’)」の中には、そのような新奇さを私たちに予期させるものは何もない。

¹⁵ [Prior 1970] p.321.

¹⁶ *Ibid.*

¹⁷ [Evans 1985] pp. 357-8.

すなわち彼は、プライアーの意図とはまったく逆に、「現在において」「過去において」「未来において」ということを表す時制演算子を、空間全体の中での「領域」「文脈」としての相対的「位置」を示す「右側において」「左側において」ということを表す演算子と並行的な演算子としてしか理解できなかったのである。しかし、このような空間的指標と並行的な時制演算子の解釈こそ、まさしくプライアーが退けようとしていた解釈であることは、次の叙述からも明白である¹⁸：

できごとの過去性、すなわちそれが起きたということは、そのできごと自体と同じものではない。またその未来性についても同様である。しかしできごとの現在性は、まさにそのできごとなのである。たとえば私の講義の現在性は、まさに私の講義である。さらに、ケンタウロルスについての実在する思考内容(real thought)および実在するケンタウロスについての思考内容は、ともにケンタウロスについての思考内容そのものであるように、ウィトロウの講義の過去性およびその過去の現在性は、ともにその過去性そのものである。そして逆に、ウィトロウの講義は、いまは現在的ではなく(isn't now present)、したがって、実在的ではなく、事実ではないけれども、にもかかわらず、その過去性、それが起きたということ(its having taken place)、は現在的事実であり(is)、実在であり(is)、時間が続く限り、今後もそうであるだろう。

この叙述によってプライアーは、決して「過去・現在・未来」を「右・ここ・左」のように一つの実在世界・現実世界内での同等の領域・文脈として捉えてはならず、あくまでも過去性や未来性という一種の時間的モードを伴う形での現在の事実の一部として過去や未来のできごとを捉えなければならないということを強調している。それはちょうど、「おそらく(私は暑い)」「言われるところでは(私は暑い)」というエヴァンズが挙げた例文が、あくまでもこの現実世界のこの場所でのこの「私」の様相的モードとしての私のあり方の一部であるということを強調しているのとまったく同様である。これに対し、私の右側の誰かである「私」と左側の誰かである「私」はその各々の誰かである「私」自体と同じものではない、とか、彼らはここにいるこの「私」のあり方の一部である、などとは誰も主張しないだろう。

さらにエヴァンズの説明の不適切さは、エヴァンズが挙げている「右側において(私は暑い)」(‘To the left(I am hot)’)のような空間的指標語の中に「私」という一人称文が埋め込まれたときは、その(離れた)右側の「私」がここでの「私」と別物にならざるをえないということによっても確認できる。その理由は、「貫-空間同一性」とでもいうべき、分離した多領域間での「もの」の同一性というものはありえないからである¹⁹。これに対し、様相的文脈では多世界的「貫-(可能)世界同一性」がありうるのとまったく同様に、時間的文脈では「貫-時点同一性」が完全に有意味なのである。

エヴァンズの時制論理批判の問題点が以上のようなものであるならば、やはりその究極的原因は、先に示した次の(5n)という定式化によるホモフォニックな意味理論に対する無顧慮という点に行き

¹⁸ [Prior 1970] p.322.

¹⁹ この点については、[Kachi 1998]も参照されたい。

着くことになる：

$$(5n) \quad (\forall S)(\forall u)[Of(S,u) \supset (Correct_n(u) \equiv True_n(S))]$$

この定式化においては、真理述語は指標を伴っておらず、「真である（「である」は現在時制）」という端的・単項的な真理概念が用いられている。そして実際、このような定式化に基づくホモフォニックな意味理論を理解している者は、その「発話の時点」をも同時に知っている必要はない。その発話によって語られる時点は、自動的にその発話の時点となるからである。そしてその点が、それに対応するエヴァンズの定式化(6)によって示される＜時点に対する指示や量化を含む、ホモフォニックでない意味論＞すなわち可能世界意味論との最大の相違である：

$$(6) \quad (\forall S)(\forall u)(\forall t)[Of(S,u) \supset (Correct-at-t(u) \equiv True t(S))]$$

そしてこの(6)は、本来は次の(6')のように定式化されるべきなのであった：

$$(6') \quad (\forall S)(\forall u)(\forall t_1)(\forall t_2)[(Of(S,u) \wedge At(u, t_1)) \supset (Correct-at-t_2(u) \equiv True t_2(S))]$$

さらにこの(6')と並行的な形で様相論理版を定式化したのが次の(6'w)であった：

$$(6'w) \quad (\forall S)(\forall u)(\forall w_1)(\forall w_2)[(Of(S,u) \wedge At(u, w_1)) \supset (Correct-at-w_2(u) \equiv True w_2(S))]$$

これと同様に、(5n)と並行的な形で様相化された端的・単項的真理による定式化を作ってみるならば、次のものとなる：

$$(5a) \quad (\forall S)(\forall u)[Of(S,u) \supset (Correct_a(u) \equiv True_a(S))]$$

§5 まとめ

以上に登場した定式化に不足分を加えうえで改めて整理すると、各定式化を次の六群に分けられることになる²⁰：

(A) 無様相的・無時制的な述定のもとでの端的・単項的真理による定式化

$$(5) \quad (\forall S)(\forall u)[Of(S,u) \supset (Correct_u(u) \equiv True_u(S))]$$

(A') エヴァンズによる解釈 T_1 の（不適切な）定式化

²⁰ (7w)が不足分。また、(6)は(A)の変形と見なす。

$$(6) (\forall S)(\forall u)(\forall t) [Of(S,u) \supset (Correct-at- t (u) \equiv True t(S))]$$

(B) 様相的・時制的述定のもとでの端的・単項的真理による定式化（解釈 T₀）

$$(5a) (\forall S)(\forall u) [Of(S,u) \supset (Correct_a(u) \equiv True_a(S))]$$

$$(5n) (\forall S)(\forall u) [Of(S,u) \supset (Correct_n(u) \equiv True_n(S))]$$

(C) 可能世界・時点への量化を含む、指標的真理を用いた可能世界意味論における T₃ 版の定式化

$$(7a) (\forall S)(\forall u)(\forall w) [(Of(S,u) \wedge At(u, w)) \supset (Correct-at- w (u) \equiv True w(S))]$$

$$(7) (\forall S)(\forall u)(\forall t) [(Of(S,u) \wedge At(u, t)) \supset (Correct-at- t (u) \equiv True t(S))]$$

(D) 様相的・時制的述定による真理を用いたホモフォニックな意味論における T₃ 版の定式化

$$(7w) (\forall S)(\forall u) Necessarily [(Of(S,u) \wedge u_a) \supset (Correct_a (u) \equiv True_a(S))]$$

$$(7n) (\forall S)(\forall u) Always [(Of(S,u) \wedge u_n) \supset (Correct_n (u) \equiv True_n(S))]$$

(E) 可能世界・時点への量化を含む、指標的真理を用いた可能世界意味論における T₁ 版の定式化

$$(6'w) (\forall S)(\forall u)(\forall w_1)(\forall w_2) [(Of(S,u) \wedge At(u, w_1)) \supset (Correct-at- w_2 (u) \equiv True w_2(S))]$$

$$(6') (\forall S)(\forall u)(\forall t_1)(\forall t_2) [(Of(S,u) \wedge At(u, t_1)) \supset (Correct-at- t_2 (u) \equiv True t_2(S))]$$

(F) 様相的・時制的述定による真理を用いたホモフォニックな意味論における T₁ 版の定式化

$$(6'w') (\forall S)(\forall u) Necessarily [(Of(S,u) \wedge u_a) \supset Necessarily (Correct_a (u) \equiv True_a (S))]$$

$$(6'n) (\forall S)(\forall u) Always [(Of(S,u) \wedge u_n) \supset Always (Correct_n (u) \equiv True_n (S))]$$

以上のうち、エヴァンズは古典論理に最も近い定式化としての(B)に思い当たらず、その代わりに(6)を用いてしまったために、(E)というとんでもない解釈(の可能性)をプ라이어(およびギーチ)に押しつけることとなったのであった。そして本来プ라이어が想定していたホモフォニックな時制的意味論における現在時制述定による端的・単項的真理と同様に、現実性述定による端的・単項的真理を用いるならば、エヴァンズが主張していたとおり、解釈 T₁ であれ解釈 T₃ であれ、可能世界・時点への量化を含む意味論と完全に並行的な形でホモフォニックな意味論による定式化が可能であることが(C)~(F)によって示されている。そしてそのことは、エヴァンズの意図に反して、時制論理における文の埋め込み方法が、様相論理においてはまったく見られない「新奇」なものでは決してないということをも立証しているのである。

そして改めて、可能世界・時点への量化を含む意味論に基づく意味理論とホモフォニックな意味論に基づく意味理論との相違について考えてみると、前者は、多世界説的な世界像のもとで、発話者をひとつの観察対象として記述するような理論、いわば外在的意味理論であるのに対し、ホモフォニックな意味理論は、発話者自身がその当事者として構築する理論としての内在的理論だという差異だと言える。外在的意味理論は、すべての可能世界や時点の外に立ったうえで、発話の観察者

がその中のいずれかの世界や時点で発話する場合、どのような理解を必要とするかを記述する。これに対し、内在的意味理論は、そのいずれかの世界や時点に内在する発話者の視点を採用したうえ、そのような内在的当事者にとって必要な理解の内容を記述するのである。

(A) (および(A')) のような無様相的・無時制的意味理論においては、そもそもこのような差異が現れようがない²¹。にもかかわらず、我々は現実世界に内在しながらそこからは出られないという(意味論観点からは)偶然的な事情のゆえに、(5a)に見られるようなく本来的に内在的であるホモフォニックな意味論における ‘_a’ を用いた現実的真理の内在的述定>と(7a)(6’w)に見られるようなく本来的に外在的である可能世界意味論のもとでの現実的真理の外在的述定>との双方が、(5a)に見られるような無様相的・中立的述定と見まがえられてしまった。これに対し、日々新たな「現在時点」を生きていくという我々の事情を反映せざるをえない時制論理においては、(5n)のような現在時制による内在的真理と(7)(6’)のような指標的述定による外在的真理との相違が自ずから顕在化したのである。

そして時制論理に対してそのような内在的真理を用いた意味理論が許されるのは、「現在時点」が、一つの世界内での「この場所」のような単なる一文脈としてではなく、「現実世界」と同じようにひとつの「世界」を構成していると解釈しうるからである。まさしくブライアーは、「時間的実在論者」として、そのような意味での「現在主義」の世界像を提示していたのであり、エヴァンズが理解できなかったのはそのような世界像だったのである。

【参考文献】

- [Cappelen, Herman & Hawthorn, John 2009] *Relativism and Monadic Truth*, Oxford University Press.
- [Evans, Gareth 1985] Does Tense Logic Rest on a Mistake?, in *Collected Papers*, Oxford University Press.
- [Kachi, Daisuke 1998] The Ontology of Many-Worlds : Modality and Time, *The Paideia Archive: Twentieth World Congress of Philosophy*, 13:42-46.
- [Kaplan, David 1989] Demonstratives: An Essay on the Semantics of Logic, Metaphysics, and Epistemology of Demonstratives and Other Indexicals, in *Themes from Kaplan*, ed. J. Almog, J. Perry, and H. Wettstein. Oxford University Press, 481-566.
- [Macfarlen, John 2009] Nonindexical Contextualism, *Synthese*, 166:231-50.
- [Prior, Arthur, N. 1970] The Notion of the Present, in *The Study of Time: Proceedings of the First Conference of the International Society for the Study of Time*, eds. J. T. Fraser et al., Springer-Verlag, 320-323.
- [Prior, Arthur, N. 1996] Two Essays on Temporal Realism, in *Logic and Reality: Essays on the Legacy of Arthur Prior*, ed. J. Copeland. Oxford University Press, 43-51.

※本研究は、JSPS 科研費 20K0028 の助成を受けたものです。

²¹ ただし、古典論理に基づく無時制的意味理論は、時制文を無時制化して日付(dates)を補足することによって作られる「永久文」を利用しており、それによって「時点」を対象化しているという意味においては、外在的な意味理論の一種だと言えるかもしれない。